

---

## II 栗山農業のあゆみ

---

# 1. 栗山町のすがた

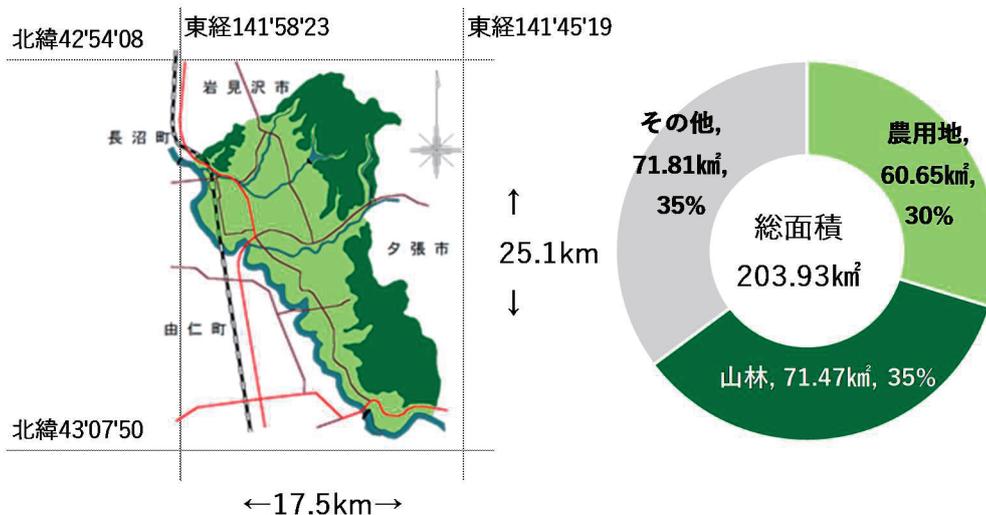
## (1) 栗山町の地勢

栗山町は【図表 2-1】のように、北海道の中央部、空知総合振興局管内の最南部に位置しています。東は夕張山系に続く緩やかな丘陵部で夕張市と接し、北はクッタリ山脈をもって岩見沢市と接すると同時に、空知郡と夕張郡の郡界となっています。南西は夕張川を隔てて由仁町および長沼町に接しています。そのため、【図表 2-2】のとおり、総面積 203.93 km<sup>2</sup>のうち 30%にあたる 60.65 km<sup>2</sup>が農用地であり、35%が山林となっています。

【図表 2-1】 本町の所在地



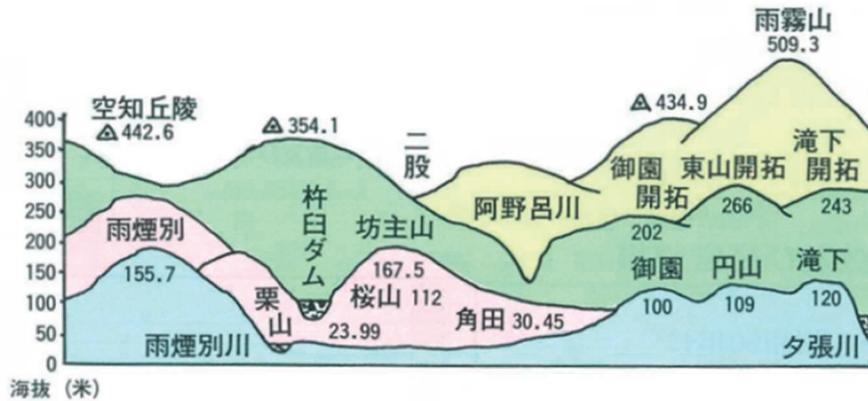
【図表 2-2】 本町の面積と位置、範囲



資料：面積は「ポケット統計くりやま 2021 年度版」、位置と範囲は「平成 30 年度版栗山の統計」より

河川との関係では、石狩川の下流域のいわゆる石狩低地帯の東端に位置しているといえます。石狩川の支流である夕張川が、馬追丘陵と夕張山地の間を南東から北西方向に蛇行しながら流れ、その流域に広く沖積低平地を形成し、さらにその外側には沖積地よりやや高い標高の段丘(台地)が作られています。雨煙別川やポンウエンベツ川、阿野呂川などの中小河川もここから段丘面を削って夕張川に流れ込み、ともに沢地(沖積地)を形成しています。一方の東部は、第三紀層に由来する泥岩と砂岩からなる丘陵地となっており、【図表 2-3】にあるように、夕張山地に連なる雨霧山(標高 509m)を最高峰としています。南部の台地や丘陵地には樽前山系粗粒火山灰が被覆している地帯が広がっています。

【図表 2-3】 栗山町の断面図



資料：『土からのメッセージ 土壌診断事業実施報告書』より

## (2) 自然環境

気象条件は【図表 2-4】のとおりです。初霜は10月初旬、終霜は5月上旬であり、初雪は11月上旬で終雪は3月下旬です。4月に融雪があり、早ければ4月中旬より耕起を開始できます。4月から10月までは南風が多く、強く吹く場合もありますが、それ以外は北西風となります。明治期から昭和初めの気候様相が『角田村史』に記載されていますが、1～2月の最低気温だけ現在の方が2～3℃低い数値となっている他は現在とそれほど変わっていません。

【図表 2-4】 本町の気象条件

	平均	過去最高(年次)
最高気温 [°C]	31.8	34.6 (H19)
最低気温 [°C]	-22.1	-28.7 (S53)
日照時間 [時間]	1,737	1,948 (H26)
降雪量 [cm]	457	826 (H7)

資料：「平成30年度版栗山の統計」より

注1)平均とは平成19(2007)～28(2016)年の平均値である。

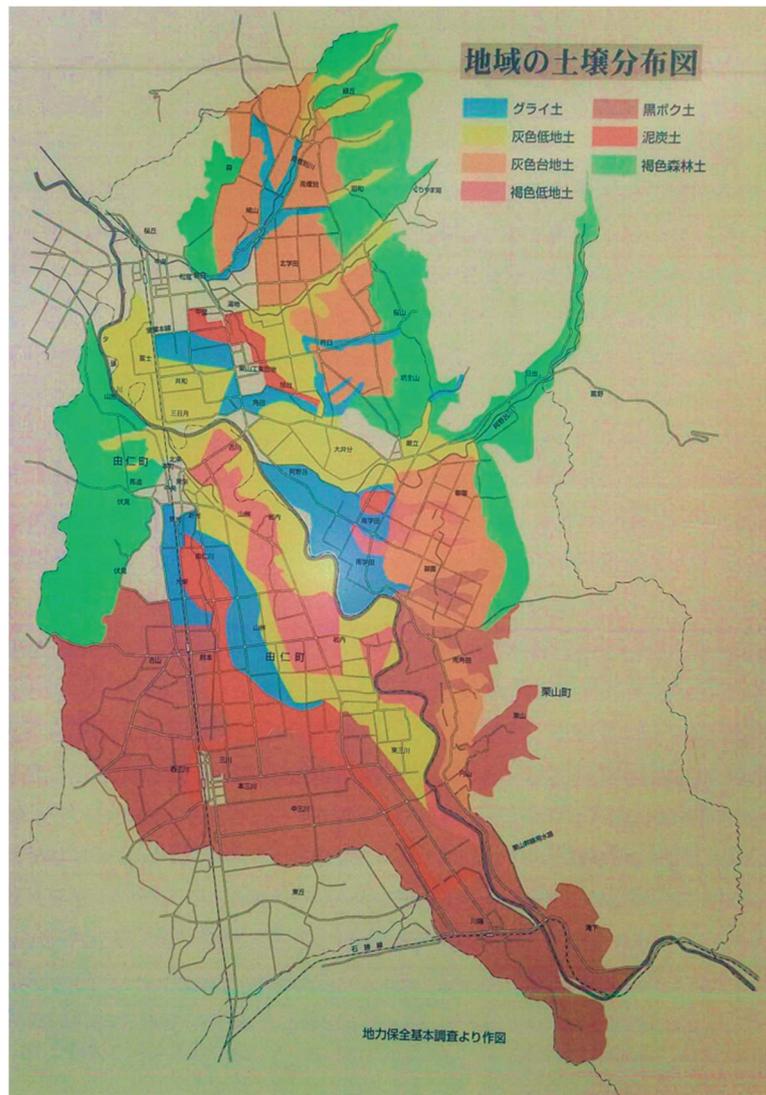
注2)降雪量の過去最高値だけ、1975年～2019年から抽出。



土壌条件は【図表 2-5】のように、大きく 7 種類に分けられた土壌が、先に述べた①沖積地、②洪積世堆積の段丘面、③丘陵地の 3 種の地形の上に分布しています。①沖積地は主に水田に利用されており、夕張川右岸の後背湿地には灰色低地土とグライ土が、夕張川支流の沢地には褐色低地土と灰色低地土、グライ土が分布しています。②洪積段丘面は水田または畑地に利用されており、灰色台地土が広がっています。主に畑地に利用されているのが③丘陵地であり、南部は黒ボク土、北部は褐色森林土となっています。

多様な作物生産の基盤となっているこの栗山の土壌や地形ができるまで、氷河期の到来と支笏湖火山の活動などさまざまなドラマがありました。これは『第 4 期栗山農業ルネッサンス』に詳しく述べられています。

【図表 2-5】 栗山町の土壌分布



資料：「地方保全基本調査」（空知南部は昭和 47(1972)年に実施）より

### (3) 農業の位置付け

産業という切り口で農業をふかんして見ますと【図表 2-6】のとおりになります。産業別人口の 20% が農業に関わっており、主要な働き先となっていることがうかがえます。また、多くの事業所を生み出すことで、町の産業を支える存在ともいえます。

農業には産業以外の役割も多くあります。本町の純農村<sup>1</sup>人口は居住人口の 15% ですが、本町の土地の 30% を占める農用地を利用

しています。農用地は市街地と山地の間にあることで、山から迫ってくる自然のある種の防波堤という役割も担っており、営農によってそれが保たれているといえます。

また、本町の景観保全や降雨の時に洪水を防ぐ田んぼダム、教育等の多面的機能も持っています。特に教育としては、主に若手農業者によって行われている食農教育のほか、本町で長く取り組まれてきたものに「ハサンベツ里山 20 年計画」があります。後者は離農跡地を人と自然の共生の場としての里山にする取り組みで、昭和 63(1988)年より始められました。体験田んぼの造成など、自然環境と農業の関わりを体験して学べる場となっています。

一方で、こういった重要な位置付けがあるのにも関わらず、人口減少の今日においては、農村部の奥まで居住を支える生活インフラの維持が課題となっています。

【図表 2-6】本町における農業分野の位置付け

項目	栗山町全体	農業分野	
		割合又は対比	
土地(R2)*1	203.93km <sup>2</sup>	60.65km <sup>2</sup> 田42.55km <sup>2</sup> 畑18.10km <sup>2</sup>	30%
産業別人口(R2)*2	5,704人	1,146人	20%
事業所(H28)*3	第2次産業111 第3次産業465	農家戸数428	43%
自治組織(R4)*4	町内会・自治会60	農村自治会24	20%
居住人口(H27)*5	12,344	純農村人口1,904	15%
居住世帯(H27)*5	5,186	純農村世帯677	13%

資料：\*1 「ポケット統計くりやま 2021 年度版」、\*2 R2 国勢調査、\*3 「H30 年度版 栗山の統計」、\*4 R4.4『広報くりやま』、\*5 H27 国勢調査、より

注)農家戸数は H27 の値を用いた。



<sup>1</sup> H27 時点で農業者が居住し、農業振興推進委員の選出単位となっていた 24 地区。

## 2. 栗山農業の系譜

栗山農業の始まりはこの地に鋤を下した年であり、平成 30(2018)年には 130 周年を迎えました。農業が始められて以来、世代を超えて脈々とつながれてきたものが今の栗山農業らしさを作っており、さらには、これからのあり方を考えるヒントにもなり得ます。はたして、それは一体何でしょうか。肥沃な土地であることに加え、産炭地を背景とした鉄道敷地と交通利便性の向上、そしてそれを見越して地域農業発展の礎を築いてきた人物の存在と展開されてきた作目に着目して見ていきます。

### (1)開拓の祖

#### ①3 人のリーダーによる開礎

##### 泉麟太郎翁による阿野呂川左岸入植

本町の開墾は、明治 21(1888)年に本州から 3 人のリーダーのもと 3 団体が同じ年に、栗山の阿野呂川と雨煙別川の流域に入植して始まりました。

開礎の第一人者として知られるのは泉麟太郎です。本町は昭和 24(1949)年に「栗山町」と改名されるまでは「角田村」でしたが、この名称は彼が仙台藩支藩である角田藩士であったことに由来しています。泉麟太郎他旧角田藩士は明治 3(1870)年に室蘭郡に入植しましたが、土地が狭く農地不足が深刻化していた上、開拓生活は非常に困難を極め、屯田兵の入植予定も決まっていたことから、泉麟太郎は移動することを決心します。それが現在の阿野呂地区でした。当時、室蘭郡長であった古川浩平氏が夕張郡由仁に土地払い下げを受けて開墾していた事例に後押しされたためです。しかし、内陸人跡未踏の処女地への入植は多くの資力が必要であったため、泉氏は合資共同体組織として「夕張開墾起業組合」を設立します。明治 21(1888)年、アイヌのテッピーア(夕張鉄五郎)氏が先導する丸木舟に乗り、阿野呂原野に上陸。現在栗山町開基の日となっている 5 月 16 日に、7 戸が阿野呂川左岸に開拓の鋤を入れ、ここに栗山農業をスタートさせました。



入植当時の角田付近

##### 林梅五郎ら山口県人による阿野呂川右岸入植

同年、泉氏が入植した阿野呂川右岸に、林梅五郎をリーダーとした山口県人団体 11 名が土地払下を受けて入植しました。北海道庁の移住手続きの手違いで最初は札幌郡手

稲村に入植しましたが、その地が手狭のために、他で農耕適地を探して千歳方面に出向いていた際、アイヌから阿野呂の地が農耕適地との情報を得て転住を決めます。

### **空知集治監看守渡辺大助による雨煙別川北岸入植**

茨城県人である渡辺大助は明治 15(1882)年に今の三笠市にあった空知集治監の看守として北海道に足を踏み入れました。その後、囚人の脱走追跡で阿野呂原野などを巡回する中で「北海道は将来有望の地であるから・・・土地の開拓に従事することにしよう。」との初志貫徹のために、明治 21(1888)年に官を辞して夕張川との合流地点雨煙別川北岸ハシャンベツ(今の桜丘)に土地払下を受けて入植しました。

### **3人のリーダーの共通点**

北海道の開発は海岸沿いあるいは河川から移住が始まり開墾されていくことになりましたが、本町のような内陸部への開墾移住は、大きな資本と人員が必要でした。これに対して、3人のリーダーは旧土族移民で教養のある高潔な人格者として、明治という新しい時代に、零細な府県の地に限界を感じて、北海道の土地開拓に身を投じて地域発展に尽力してきたといえます。

## **②公営農場の開拓**

さらに、本町の農業開拓の特徴といえる多くの資本家農場とは別に、公営農場による開墾があります。

### **御料農地**

明治 22(1889)年に明治政府が皇室の御料財産として、国有未開地の一部を選定して「御料地」を設定しましたが、当時の角田村域内の御料地の内の農耕適地に、明治 31(1898)年から築別御料地として小作人を入れて開拓し営農が進められました。特に、5年間の小作料免除などの小作育成のための便宜が図られ、土地も地味が良く借地料も安かったため入植希望者が増え、明治 40(1907)年までに継立 50 戸、多良津 60 戸、築別 70 戸、二股 19 戸と本町南部地区の農業発展に大きく寄与しました。

### **学田農場**

北海道大学の前身である札幌農学校が、学生の農業演習に供しながら、本道農牧畜の基礎研究を目的とした農場施設として、明治 23(1890)年に「夕張学田」として雨煙別(学田第五農場)と阿野呂(学田第六農場)に分割設置され、明治 28(1895)年から小作人を導入して農場体制を整えました。一区画 5ha として小作人入地に道路排水の工事を行

うなどの便宜を図り、小作料も入植3年間は無料とし、その後も安く抑えたことで小作入植者が増加していきました。

また、北海道庁では、札幌農学校実習生が卒業後も道内に定着し、農学校で得た農学知識と技術をもとに農業開拓に指導的役割を果たすことを目的として、学田農場周辺に実習生払下地を設定しました。角田村では杵臼と大井分に設定され、明治25(1892)年の石原市助、明治26(1893)年に小島小治郎と内田榮三郎、明治28(1895)年伊藤廣幾が入植して農業開墾に努め、農業生産の発展に貢献しました。

### 村営農場

明治25(1892)年に旭台にあった夕張開墾起業組合の共有地32万坪(105ha)を、村有地として村の基本財産に編入して、これを区画して小作人による開拓営農に当たらせ、村財政を補うこととしました。特に、農地の貸付料(地代)は村の収入となる訳ですが、村有地という性格上、安定農家育成という農業政策上の観点から、水田は物納、畑地は金納という小作契約が取られ、本町の小作契約の良き慣習として後々まで影響を与えました。

### ③土壌・人材・交通ともに利のある土地

栗山市街地の開発は、岡山県人の旧家出身の杉武一郎が明治23(1890)年にウエンベツ地区(現在の雨煙別川南岸、栗山駅市街地)に10万坪の土地払下を受け、開墾開拓に努めて今日の栗山市街地の素地を作りました。その後、市街地に明治26(1893)年北海道炭礦鉄道の栗山駅ができると、本州からの輸送船が発着する小樽まで鉄道輸送するために、農産物の集積がなされるようになります。人が集まり商業が盛んになると、麻の製線や味噌醤油清酒の加工業(工業)が起こり、農業だけでなく町自体の発展が進んできました。

本町は、地味が良く気候も温和で将来性のある沃野であったことに加え、泉氏らの先見の明を持った人材による取り組み、そして交通の要衝となったことが重なり、形成されてきました。その結果、明治期後期の夕張郡角田村は「伊達紋別、樺戸新十津川とともに北海道の三農村と称される」発展した農村であったと角田村史で述べられるほどでした。



角田通りより栗山駅に向かって

## (2) 栗山農業の変遷

開拓当初は原始的な焼畑農法であり、自給食料の作付から始まりました。泉氏の夕張開墾起業組合でも、最初に播種した作物は畑作物の大麦、馬鈴しょ、そば、にんじん、バースニップ(シロニンジン)と記録があります。

やがて、経済行為としての農業生産に移行すると、換金作物生産が必要となりますが、当時の角田村は、北海道の中心地である札幌や炭鉱で栄えている夕張などの農産物消費地の近隣に位置していることや、室蘭線や幌内線などの消費地までの輸送手段に恵まれるなどから、全道に先駆けた開田に伴う水稻生産と野菜生産が盛んになり本町農業の発展に繋がりました。



庭先でそばの脱穀

### ① 水田農業の沿革

#### 水稻の基幹作物への道

夕張開墾起業組合の開墾によって徐々に移住民が増えていきましたが、不作などにより資金面での不安定性が増してきていました。また、畑地開墾ができない湿地は未墾地となっていることも課題でした。

当時の稲作と畑作を比較すると、米価は比較的高値安定していたようで、地主にしても自作農にしても、畑地を開田した方が有利な状況であったと町史に述べられています。そこで、泉氏らは開田にまい進することを目指し、明治 24(1891)年 1 月に真成社を組織しました。新会社への出資者は村内に限らず、広く札幌、本州方面にも有力者を勧誘した結果、その後の角田村発展の原動力となった高瀬和三郎や高木兼寛、實吉安純、福井正之ら開拓に志を持った有力資本家が加わり、資本企業的農場が生まれました。また、本州資本家から信頼された投資先となり、畑作開墾主体の夕張開墾起業組合の自作農に移行できなかった組合員の土地を幅広く購入して、資本家農場に転化し「8割までが農場小作地の角田村農業」の形が作られます。これにより本町農業の特殊性が生み出されました。

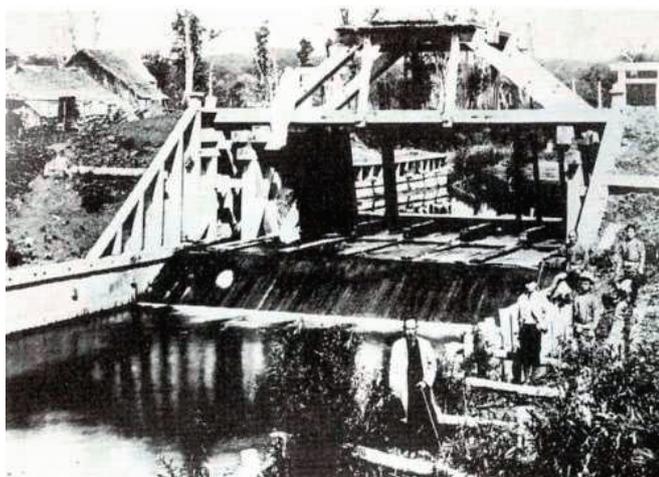
また、会社設立とともに制定された「角田村真成社開墾地取締規約」は開墾作業の日々の地域社会秩序の維持を目指す内容のものであり、未だ村役場組織がない時期に地域を守る役割も果たしていたといえます。

水田開発の実行には多くの後押しがありました。真成社資本家の高瀬氏は、畑作に比して水田作が経営上有利であることや、角田地域が水田適地であることなどを根拠に、水田作を提案していました。また、札幌以北でも水稲は期待できるという、米作の権威者であった酒匂常明<sup>さけがわ なるあきら</sup>氏の意見からも後押しを受け、明治 26(1893)年 4 月に札幌以北で初めて本格的に水田作に取り組むこととしました。高瀬氏が 5 町歩、泉氏が 3 反歩の水稲試作を行った結果、予想以上の好成績を挙げ、角田村で将来に向け本格的な水田作に着手することとなります。



畑を水田に変えるための  
試験作付けの様子(M45)

有力農場主たちは村内の土地を取得してさらなる水田開墾に奔走し、夕張川から取水する開田計画の実現に向けて、関係する官庁に出向いて検討を重ねていきます。明治 28(1895)年の角田村総会において角田村水利土功組合が設立されました。同時に、夕張開墾起業組合は解散することとなります。明治 30(1897)年には阿野呂川を水源とする角田村灌漑構の第 1 期事業が完成し、130 町歩の水田に灌漑が可能となり、水稲が本町農業の基幹作物となるほか、北海道における水田開発の発端となったといえます。これらの事業は明治 35(1902)年に「北海道土功組合法」で制定され、北海道第 1 号となる角田村土功組合設立となりました。その後、水稲が本町農業の基幹作物となっていきます。



角田村の第 1 期灌漑事業によって完成した  
阿野呂川水門(M30)

## 水稲プラス畑作農業

戦後は食糧増産を背景に造田が進み、全国で田が増加していきます。本町における耕地面積に占める田の割合(水田率)は、昭和 35(1960)年に 34%であったものが、昭和 44(1969)年には倍近い 63%に増加しました。ただ、空知地域の水田率は、昭和 35(1960)年 60%、昭和 44(1969)年 81%であり、本町では水稲が基幹作目ではあったものの、空知地域と比べると畑作も重要な位置にあったものと考えられます。実際、【図表 2-7】から見ても、空知地域の中では畑作の割合が高いことが本町農業の特徴と述べられています。

【図表 2-7】 栗山農業の特化係数(S43)

米	麦	雑穀・豆	馬鈴薯	野菜	果樹	工芸作物	種苗・飼料
0.9	6.0	4.0	5.0	1.7	0.3	2.5	2.5

資料：『農業読本—栗山町農業の現状と将来—』より

注 1)特化係数 = 栗山町の農業粗収益構成比 / 空知地域の農業粗収益構成比で求められる。

注 2)数値が 1.0 より大きいほど特化の程度が高い。

【図表 2-8】 10a あたり収量の比較(S43)

また、主要畑作物の 10a あたり収量について空知地域平均と比較した分析を【図表 2-8】に載せました。水稲は空知比 95%ですが、主要畑作野菜については、空知平均よりかなり高いことを示しており、畑作が技術的にも土地に対する適性面から見ても本町に適している作目が多いと述べられています。

以上のことから、明治の開拓期から本町農業は、水田プラス畑作(野菜)農業に経営的に有利性があったと思われます。

作物名	栗山町 [kg]	空知地域 [kg]	北海道 [kg]	全国 [kg]	栗山/空知 [%]
水稲	473	499	474	449	95
馬鈴しょ	2,200	1,870	2,730	2,190	<b>118</b>
小豆	164	145	141	113	<b>113</b>
トマト	1,980	2,060	2,540	4,140	96
ごぼう	1,670	1,660	1,570		<b>101</b>
大根	4,020	3,210	3,260	3,410	<b>125</b>
えん麦	293	252	231	224	<b>116</b>
アスパラガス	400	400	306		<b>100</b>
てん菜	4,170	3,660	3,840	3,840	<b>114</b>
トウモロコシ(実)	331	249	260	286	<b>133</b>
トウモロコシ(未)	2,630	1,110	1,240	1,140	<b>237</b>
大豆	114	141	161	137	81

資料：S43 作物統計より

## 生産調整のはじまり

昭和 42(1967)年からの米の大豊作もあり、全国レベルで需給バランスが大幅に崩れて莫大な政府在庫米が積み上がり、昭和 45(1970)年から歴史的な米生産調整が始まりました。

本町での転作対応で付記すべき点として、「全道的には生産調整に極めて無原則、安易に取り組んだ結果、目標に対して過度の実績が記録される中」本町では、関係者が「極めて堅い結束のもと理解と協力により整然と進められ、水田耕作の破壊をくい止めた」と町史に記されるように、割当面積に対して 100%の達成を維持していました。

しかし、本町の転作に対する基本スタンスは維持していても、昭和 54(1979)年に 30%の転作率となり、その後も平成 17(2005)年に 41.9%、平成 26(2014)年には 50.5%、直近の令和 3(2021)年には 61.9%と本町水田の 6 割が水稲以外の作物作付の状況になっています(P.37 【図表 3-12】 参照)。

## 水稲プラス高収益作物

米の消費減退と生産力向上で米の持ち越し在庫が膨れ上がり、昭和 45(1970)年に生産調整が始まりますが、その後も転作が増える中において農業所得確保のための方策として、「水稲プラス高収益作物導入」が本町の農業振興策として提唱されました。特に当時の栗山町農協が策定した「協同活動実践 3 カ年計画並びに栗山町地域農業振興計画」(通称、「3 カ年計画」)の昭和 49(1974)～51(1976)年度版では、「転作関係から玉葱、そ菜については大幅に伸長が見込まれる品目であり、拡充の方向で検討を進める」、「特定品目の振興～トマト、キュウリ、アスパラ、イチゴ、ほうれん草、洋菜、長芋、食用百合、メロン」と位置付けられています。さらに、平成 2(1990)～4(1992)年度版においては、「特産振興作物の作付奨励策」として、特産品 7 品目(玉ねぎ、メロン、食用百合、長ねぎ、ほうれん草、グリーンアスパラガス、花き)を指定し、振興策としてビニールハウス助成を実施しています。

実際、3 カ年計画の主要品目の生産計画の基準年の面積を、昭和 58(1983)年と平成 16(2004)年を比較すると、水稲は転作の進行で 83%ですが、畑作の麦類は 94%、大豆は 714%と伸びています。馬鈴しょは、食用が大きく減少し種子も割当面積減で 83%となっています。畑作ビートも 32%と大きく減少しました。野菜関係は玉葱、長葱、南瓜、メロンが大きく伸びています。キュウリは高齢化で生産者が減少、トマトは最近の人気作物であり生産農家の新旧交代で現状維持、長芋とアスパラは減少していますが、近年はアスパラガス立茎栽培法が確立されて再増加しています。花百合根は完全に輸入に置き換わり消滅しました。新しい動きとして、畑作では種子用麦大豆の取組、イチゴと苺苗の栽培が始まり、花卉栽培も伸びています。

## 麦大豆の本作化

さらに、転作強化や市場開放などによる農産物価格低迷、農家戸数の減少と経営規模拡大、担い手不足という状況は農村が非常に暗い沈滞ムードの中に陥りました。また、転作田では経営に寄与しない作物が転作の大宗を占め、その上に低収の小麦など交付金に主眼を置いた作付が課題となっていました。そこで、転作農業の確立を目指して、転作田における麦大豆の本作化を平成 14(2002)～16(2004)年度農協 3 カ年計画に盛り込み、収量増加と品質向上そして所得の確保を目指すこととしました。

特に平成 20(2008)年からは、本町在住の元北海道立十勝農業試験場長の尾崎政春氏を農業技術アドバイザーとして農協に迎え、本町の小麦安定生産に向けての小麦生産者の啓発と方策を実行しました。特に、良質種馬鈴しょ生産と転作畑の秋播き小麦品質向上のための土づくり対策として、飼料用トウモロコシの実穫栽培として子実用トウモロコシ生産に取り組み、近年は飼料用途だけでなく食用のコーングリッツとして流通を展開させて、道内小麦製粉会社の江別製粉の企業誘致までに発展しました。

さらに従来は秋播き小麦は麺用中力小麦でしたが、平成 26(2014)年からは、土壤伝染ウイルスに耐病性がある超強力パン用小麦である「ゆめちから」に全面的に転換しました。



本町基幹作物小麦

## ②畑作・畜産の今日

### 主要畑作物の変遷

先に述べたとおり、開墾当時はすべて畑作であり、自給生産から穀類豆類を主とした換金作物生産に続き、栽培技術面では輪作の導入や作業の機械化、調製機械の導入などが進みました。本町の作付について、大まかに見てみると南部の火山灰地帯は豆類、小麦の作付が多く、北部の丘陵地帯は麦類亜麻菜種などの工芸作物作付が多かったようです。日出・継立と栗山市街は野菜類の生産が多くみられました。

品目では、府県からの種子で少ない肥料又は無肥料で栽培可能な大豆・小豆などの豆類が最も大きく作付されていました。また、北海道庁が奨励した小麦・裸麦も作付されていますが、当時から黒穂病に悩まされ、風呂湯浸漬法という種子温湯消毒法で対応しました。麦類のえん麦についても、馬など家畜の自家飼料として、また粗放的な栽培でしたが、収穫期の雨天が心配の種でした。馬鈴しょについては、まずは主食用として生産が始まりましたが、次第に澱粉生産用として作付が増加し、数少ない今日まで生産が引き継がれ、昭和 22(1947)年現在は種馬鈴しょ栽培となっています。亜麻については、入植当時の換金作物として作付が始まり、その後北海道製麻株式会社栗山亜麻製線工場誘致が実現して契約作付面積が一時期増加しましたが、連作障害、価格的面、大洪水による災害で大きく作付減少しました。



唐竿からきおを使った豆の脱穀(M30)

本町の基幹作物は、本町開基以来水稲が第一位でありましたが、令和の時代の令和2(2020)年に小麦が一位となり続いて大豆となっています。これらは転作面積増大の影響が大きく転作麦が1,160ha(麦全体の65.5%)、同じく大豆が286ha(大豆全体の55.6%)となっています。

### 採種組合の設立

馬鈴しょについては、開墾当時の角田村に鋤が入りました明治21(1888)年から食用として馬鈴しょが栽培されています。本町の特徴的なことは、種子用としての特別な栽培ではありませんが、大正の末期から一般栽培の中から無病芋を選んで府県移出していたと『栗山馬鈴しょ採種組合30年記念誌』に記述があります。昭和22(1947)年に角田村馬鈴しょ採種組合が設立され、昭和39(1964)年には歴史的な種馬鈴しょの農協一元集荷体制を確立させ、現在、府県移出用種馬鈴しょは本町の特産農産物であり、本町畑作物の基幹作物として重要な位置にあります。

そ菜種子生産と販売開拓を目的として昭和25(1950)年6月に、後にハウレン草のF1種を育成しました永池暁三氏が組合長となって、栗山町湯地採種農業協同組合が設立され、採種技術の研究と向上、農家への指導、優良なそ菜品種の販売が行われました。

これらの2つの採種組合設立は、農業生産に不可欠な種子の生産増殖技術と意識の醸成に大きく貢献しているものと思われます。

さらに、平成12(2000)年に畑作物の春播小麦、秋播小麦、小豆、大豆の種子生産者の生産者組織として栗山町麦・豆類採種組合が設立され、その他民間の野菜種子生産や種芋と相まって、本町の「種の町」の名声を創り上げています。



## 特徴的な野菜生産

本町の野菜生産は、明治 23(1890)年 6 月に夕張媒炭(石炭)所が開発されて抗夫が入山し、明治 25(1892)年 11 月鉄道室蘭線が開通して栗山駅市街地発展に伴って野菜需要が増えたことで、多くの品目で始められました。野菜専業農家には至らず、水田プラス畑作に野菜を入れた複合経営が多くを占めていました。

その後、大正 12(1923)年に二股野菜組合、大正 13(1924)年に角田百合共同出荷組合などの生産者組織が設立され、栽培技術の向上や品質の統一、販売活動を積極的に行い、振興を図ってきました。戦前の角田村の名産農産物となった、メロンと食用百合根がここで生まれます。特にネットメロンは研究熱心な篤農家が温室メロンとの一代交配雑種(F1 種)に取り組んだことで開発され、今日の赤肉系ネットメロンの興隆に繋がっています。

しかし、一時危機に面したことがありました。昭和 50 年代に栗山町では公害問題である六価クロム禍問題が発生し、マスコミの過誤報道により、栗山町産農産物はその風評被害に遭い、札幌市場などにおいて一斉に買われなくなるという惨事に見舞われたのです。特に、札幌市場で好評を得ていた栗山町東山地区で栽培されていた夕張キングメロン種が多大な風評被害を受け、近隣地域産メロンに地位を奪われたという悲しい過去がありました。そ



その後、バブル時期に入ると、北海道夏場の味覚として赤肉系ネットメロンのギフト需要が伸びてくる中で、当時の栗山町農協でもメロンブランドを展開させて、信頼を回復させていきます。既存のキング種の「くりやまメロンキング」に加え、水稻プラス高収益作物導入の一つとして導入していたレット種の「くりやまメロンクイーン」のダブルブランドの販売戦略を取ることにしました。その結果、札幌市場では、赤肉メロンのキング系では、夕張、追分に次ぐ三番手ブランドとなり、さらにキング系以外の赤肉メロン第二グループで一番手のブランドとなることができました。さらに、その後、メロン育種種苗メーカーが持ち込んだサッポロレッド 113 が夏系メロンの「きららクイーン」という新ブランド名で売り出し、皮が薄く糖度も良く棚持ちするメロンとして好評を博し今日に至っています。

このほか、後世に伝えたい野菜品目が多数あるため、【図表 2-9】に生産部会と品名を記します。

これらの取組に共通して言えることとして、どのような作物も栽培ができる自然的条件に加え、それら条件を取り込んで栽培する先駆的農家が多数いたことと、販売戦略の立つ数量になるまで農家自身で継続的に取り組んできたことが挙げられます。

【図表 2-9】本町における平成以降にできた生産組織一覧

設立年	生産組織名（現存）	取り扱い品名
H3	栗山町「栗マロン」研究会	「栗マロン」南瓜
H10	そらち南農協いちご部会	生食用イチゴ
H11	くりやまメロン生産組合	「きららクイーン」メロン
H12	そらち南麦・豆類採種組合	種子用麦・豆類
H13	そらち南減農薬米生産組合	減農薬米
H13	そらち南農協苺苗部会	苺苗
H15	そらち南農協ピーマン部会	ピーマン
H19	そらち南和牛生産組合	繁殖和牛
H19	そらち南農協アスパラガス部会	アスパラガス
H21	そらち南食用馬鈴薯部会	食用馬鈴薯
H21	JAそらち南「ゆめぴりか」生産組合	「ゆめぴりか」米
H21	JAそらち南南瓜振興会	南瓜
H22	そらち南農協水稻直播部会	直播の水稻
H26	栗山町さらさらレッド生産組合	「さらさらレッド」玉ねぎ
H30	そらち南大豆生産組合	大豆
H31	JAそらち南にんにく部会	にんにく
R元	JAそらち南ブロッコリー部会	ブロッコリー
R2	そらち南農協スライストマト組合	スライストマト
R3	生姜研究会	生姜
R4	そらち南農協マルチコーン生産振興会	子実用トウモロコシ

資料：第4期栗山農業ルネッサンス、およびJAそらち南営農部・販売部資料より

注)平成21年2月、栗山町農協と由仁町農協が合併し、そらち南農協を設立。

## 畜産の盛衰

戦前は軍馬として、また近年までは農耕用として馬は重要でした。馬産に心血を注いだ先駆的指導者により長年献身的努力を重ねて馬産に取り組み、質頭数ともに空知管内有数の馬産地に発展したようです。

また、めん羊についても、戦前から衣料原料の羊毛生産のために飼育が盛んになり、全道あるいは全国共進会に出陳されて数々の優秀な成績を得ていました。

戦後の肉類の消費需要増大により豚の飼育も急増しましたが、枝肉価格の頭打ちや、飼料の高騰、多頭飼育による病気の問題で急激に減少し、現在は養豚専業法人のみとなっています。

養鶏は明治30年代ころから湯地農場で飼育されていたとの部落史に記述がありますが、昭和30年代ではほとんどの農家で飼養されていました。その後、大羽数飼育が主流となり、本町においても現在は鶏卵専業生産法人のみとなっています。

乳牛については、湯地農場での有畜農業取組以来飼育があります。昭和30年代前半には271戸の飼育農家で647頭の乳牛が飼育されていましたが、その後乳価の低迷や飼料の高騰、専業化などの農業情勢変化により、現在飼育されていません。

この反面、繁殖和牛飼育が始まり、平成19(2007)年に栗山町和牛生産組合(現そらち南和牛生産組合)が設立され、本町の畜産業は乳牛から和牛繁殖に転換されていきました。



綿羊試験飼育綿羊組合結成(T12,3頃)

### (3) 農業経営複合化の再構築

栗山町農協の平成 5(1993)年～7(1995)年度栗山町地域農業振興計画・協同活動実践三カ年計画の中では「ガット・ウルグアイランドによる市場開放問題と例外なき関税化、バブル崩壊後の景気低迷による農産物の需要減退、農業後継者不足と高齢化の問題など農業を取り巻く環境は厳しく…」の状況の中、農業経営変革の方向として、専業化として①土地利用型専業経営、②集約型専業経営、複合化として③地域完結型複合経営、④個別完結型複合経営が示されています。これらは、経営構造改革を目指した政策から、農家高齢化と戸数減少による農村人口減少に対する地域政策への転換でした。

この間、経営規模拡大は大いに進み専業化が図られますが、平成 14(2002)年から令和 3(2020)年の 20 年間に U ターン就農者<sup>※</sup>52 名、続いて新規学卒就農者<sup>※</sup>39 名が就農し、経営が継承されつつあります(P.51【図表 3-35】参照)。同時に、高齢化によりリタイアしていく野菜農家に対しては、関係機関がこぞって新規参入受入拡大に取り組み、特に今日まで 21 世帯の新規農業参入を本町農業に迎え入れることができました。新規参入者<sup>※</sup>は高齢野菜農家に置き換わり、U ターン就農者や新規学卒就農者は経営移譲を行うことで、農家の新旧交代が行われているといえます。

さらに、本町の特徴は、先述しましたように多種多様な畑作野菜生産が行われてきている上に、最近 JA そらち南の作付推進により、にんにくや生姜、それ以外の独自のサツマイモや機能性玉ねぎなど新しい品目野菜に取り組みが進んでいます。



マルシェにて野菜を販売する 4H クラブ員

このような現象は他町村には見当たらず、野菜農家は高齢化でリタイアするとそのまま生産がなくなり、本町のような生産者の世代交代は起こらないとのこと。本町農業では「複合化の再構築」がなされていると捉えられます。

## コラム①

### 新しい挑戦—栗山町で栽培され始めた作物

本町では、これまでさまざまな作物を作ってきましたが、現在も日々新しい作物への挑戦がなされています。ニューフェイスを紹介します。

#### アスパラガス

##### 【栗山農業に合う理由】

- 露地アスパラガスを本町では元から栽培。
- 春芽の場合の収穫は、露地は5月頭からだが、ハウスであれば3月下旬から。
- 栗山農業の作業体系的にハウスの方が良く、ハウス栽培が増えてきた。
- 施設栽培を行う新規参入者の導入が特に増えている。

##### 【今後の展望・課題】

- 需要は増加傾向。贈答品として消費者に直接売りやすい。その場合クール便で送るため鮮度が保ちやすい。



#### スライストマト

##### 【栗山農業に合う理由】

- 平成30(2018)年から試験導入。
- 現在外国産が多く扱われているが、航空便であるため価格が高く、国産でも価格競争が可能。
- 北海道で採れる時期はちょうど端境期にあたる。
- 加工用で価格が安定しており、採れた分だけ販売でき、栽培計画が立てやすい
- 生食用を栽培していた農家がシフトできる。

##### 【今後の展望・課題】

- オランダの品種なので、気候の違う北海道で栽培をすると、想定していなかった生理障害が起き、選果が難しくなる。



#### 生姜

##### 【栗山農業に合う理由】

- 令和元(2019)年から試験導入。
- 5月下旬の田植え後から空く育苗ハウス等を利用して、副次的な収入を得られる。
- 育苗ハウスを張ったままでいい上、機械や農薬の購入も必要がないため、導入にあまり手間や経費が掛からない。

##### 【今後の展望・課題】

- 連作が利かないため、輪作できる面積が必要。
- 北海道産の新生姜の認知度が低い。
- 寒冷地の北海道で新生姜をヒネ生姜にする保管技術や、新生姜の加工が必要。



## 子実用トウモロコシ

### 【栗山農業に合う理由】

- 平成 20(2008)年から導入。
- 転作作物として小麦・大豆が増加したが、連作障害が問題となり、トウモロコシを輪作体系に組み込んだ土づくりが求められた。
- 最初飼料用を導入したが、実入りが良くなく価格も低いため、作付けが伸びなかった。
- 平成 25(2013)年より食用としての利用が提案された。
- 近年、安全性が高いとして国産が見直されており、価格も外国産には劣らない。

### 【今後の展望・課題】

- 刈り取り用ヘッドの機種が限られていることと導入費用かかる。
- 15°C以下で保管できる倉庫が必要である。



## にんにく

### 【栗山農業に合う理由】

- 平成 30(2018)年秋の播種から始まった。
- 産地青森県では連作障害を避けるための輪作体系が築きにくく、産地が北上してきている。
- 稲刈りの前に植え付けできる(最近では稲刈りの時期が早まり作業が被ることもある)。

### 【今後の展望・課題】

- 種子が高価で、栽培に手間もかかることから導入できる農家が限られてしまっている。
- 収穫後の乾燥具合が経験によるので、難しい。



## サツマイモ

### 【栗山農業に合う理由】

- 家庭菜園用や食育活動のために栽培されていたが、平成 29(2017)年から本格的な栽培のため試験導入。
- 北海道では未だ栽培が少ないが、積算温度が上がって適地になりつつあることや、病害リスクが低い。
- 貯蔵が可能で、加工の幅が広い。

### 【今後の展望・課題】

- 苗の供給体制の構築。
- 冬季の寒さに耐えられる暖房設備のついた貯蔵施設の確保。



栗山町農業支援員(地域おこし協力隊)

星野 愛花里